

こころ

第28回

函館港イルミネーション映画祭

第26回シナリオ大賞

函館市長賞「グランプリ」

昭和九十七年夏

鈴木享





【作者プロフィール】

すずき すすむ

昭和17年北海道十勝郡浦幌町生まれ。

十勝三菱自動車販売（株）取締役社長（帯広市）。

（シナリオ歴）

1974年 第16回シナリオ作家協会新人育成会シナリオコンクール

準佳作

1992年 帯広市市民文芸賞

1996年 NHK北海道ラジオシアタードラマ放送

2020年 函館港イルミネーション映画祭第24回シナリオ大賞1次審査

通過

【人物表】

水野 信彦 (97) (20～80代)

同 久志 (69) その長男

同 英二 (67) その次男

同 哲夫 (45) (27) 信彦の孫 久志の子

同 道雄 (43) (25) 信彦の孫 久志の子

同 良介 (40) (22) 信彦の孫 英二の子

有田 民子 (68) 民子の夫

有田 民子 (65) 信彦の長女

有田 舞子 (16) (5) 信彦のひ孫 民子の孫

島村小隊長 (27)

西川 (20) 水野の戦友

中山 (20) 水野の戦友

和江 (18) 水野の恋人

老住職 (70代、80代) 西本の父

西本 (50代) 住職

岩本 (40代) 若い日の水野の上司

寺島 (50代) 水野の同級生

戦場の少女 (5)

水野の父、母

通夜に出席の大人たち、子供たち

【あらすじ】

令和四年の今、大都會でも函館でも、変化を重ね、受け継がれてきた社会の中で人々の生活が営まれている。

戦争末期に南方戦線を経験し、96歳になった水野信彦が病床に伏し、最後の時を迎えようとしている。

夏の日、函館西波止場の深夜。濃い霧を縫って輸送船が接岸する。降りてきたのは、水野が戦争中に所属していた部隊の、既に英霊となった戦友たちである。

英霊たちは、かつて自分たちが命を懸けて守ったはずのこの国が、今どうなっているのかが知りたいので、それを水野に問う。だが、水野は明確に答えることができない。

それはまた、水野自身の戦地から帰って今日までの無力感、道が見えない苦悩でもあるのだ。

水野はその心情を英霊たちに吐露する。

加えて水野には、戦場で会った少女の姿が心の奥に強く焼き付いている。

母の遺骸の傍に座り込んでいた幼い女の子は、その後どうなったのか？
生きのびたのか？ 復員してから常に、そのことに懊悩していた。

亡くなつて家に戻つての枕経、通夜での住職の話から、残された子や孫
やひ孫たちは、水野がお寺の本堂でひたすらに祈る、それを96歳まで続け
ることで心の安らぎを求めていたことを知る。

通夜の後、子や孫たちがそれぞれに水野について思い出を語り合うが、
水野の心情に触れるものではない。

そんな中、ひ孫の舞子が幼いときに一緒に泣いて、水野の心の底に触れ
たことを話した。

戦場から帰つて七十以上を経て、水野の胸の奥の心情が、ひ孫の少女
に初めて届き、繋がり、受け継がれた。

英霊たちもこの国への不安を残しつつも、いささかの納得を得て消えて
いく。

告別式の日、水野は、ひ孫の言葉と咲き誇るひまわりの花に見送られる。

○現代

短いフラッシュ画面を続けて――。

高層ビルが林立する東京。

駅から吐き出される通勤者の群れ。

誰もがマスクをしている。

渋谷、スクランブル交差点の人の波。

電車内、誰もが手にしたスマホには

まっついていて、全く会話がない。

スーパーマーケットの賑わい。

車の渋滞の列が長く続く。

皇居前広場。ジョギングをする人た

ち。

選挙カーが走る。

立候補者の演説。

国会議事堂。

空を突き刺すような東京タワーとス

カイツリー。

オリンピック競技場の威容。

ビルの清掃人として働く高齢者。

街の中の小さな公園、夕陽を受けて

ぼんやりと座っている老人。

走る救急車。

サッカー少年団の練習、マスクをし

てボールを追う子供たち。

居酒屋の喧騒。

疲れたサラリーマンが家路について

いる。

疲れた様子の塾帰りの小学生。

夜遅く、家に帰らない若者が街にた

むろする。路上で飲み、騒ぐ若者たち。

マスクをしていない。

夜の街を昼間にするかのように溢れる光の洪水。

プロ野球を熱く応援する大勢のファン。

緑が豊かな田舎の田園風景。

緑の畑の中に立つ樹々。

山、川、点在する家々。

懐かしい古き故郷の光景。

○空と海

晴れ上がった空の下に広がる海。

タイトル

「昭和九十七年 夏」

○函館の街（朝）

海に向かい下って延びる八幡坂と緑

の並木。

港の遠望。港が和らいだ光の中にある。

海面が光っている。その先に記念館摩周丸が浮かんでいる。

朝市の賑わい。

新幹線が海岸線を疾走していく。

○函館の街（昼）

のどかに、ゆったりとした時間が流れる西波止場の倉庫群、広場。

観光を楽しむ若い女性たちの歓声。

教会。鐘の音が流れる。

路面電車がのんびりと走る。

○函館の街（夜）

人影がまばらな繁華街に沈むように
街灯が灯っている。

シャッター街になった商店街が眠っ
ているかのように静まりかえってい
る。

○函館、西波止場（深夜）

西波止場は濃い霧に包まれている。

消え残った街灯や店先の灯りが霧に
にじんでいる。

静かな時間が流れている。

霧と暗闇の中に船がぼうつと浮かぶ。

輸送船のような影が見えてきて、そ
れは波も立てずに波止場に向かって
くる。

音もなくゆっくりと接岸し、タラッ

プが下ろされる。

十数人の男たちが下船してきて地上
に降り立つ。

彼等は一様に無表情で、じつと前方
を見つめるのみ、身体をあまり動か
さず、動きは緩慢である。

その眼差しは常にはるか遠くを見る
ように柔らかく、しかし、愁いを帯
びている。

しかも、全員が旧日本陸軍の軍装を
した兵士である。背囊を背負い、銃
を携行している。

英霊たちである。

整列し、点呼の報告がされ、前に立
つ小隊長が行進の号令を発した様子
だが、声は聞こえない。

○行進する小隊

深夜の函館の街を行進する小隊。

無人の道路に、兵士たちの足音が鈍く重く響く。

○行進する小隊（別の場所）

函館駅を左に見て、行進が続く。

暗闇の中を黒い集団が黙々と進んでいく。

○行進する小隊（別の場所）

深夜の住宅街が眠りに包まれている。

小隊の行進が進んで行く。

○ある総合病院・外観（深夜）

暗闇の中、前方に総合病院と思われる

る建物が見えてくる。

兵士たち、隊列を乱すことなく、夜を歩き続けている。

病院の近くで、行進を止める。

立ち止まり、闇の中の病院を見上げるが、小隊長の指示に従い、玄関に向かう。

○病院・エントランス

正面玄関に来る兵士たち。

エントランス、風除室にあるガラスの扉を容易にすり抜けていく。

○病院・受付ホール

誰もいない深夜の受付ホール、常夜灯が灯っている。

滑るように進む兵士たち。物音さえ眠っているかのようなホールにエスカレーターがあるが、無視して進む小隊。

○病院の中

整然と進んで行く兵士たち。警備員とすれ違いが、見えていない。兵士たち、警備員のマスクが気になつて振り向く。

○病院の中（別の場所）

エレベーターホールを過ぎていく。先行した兵士がドアの閉まった階段室をみつけ、兵士たちに手で示す。

○病院・階段室の前

分厚い扉で閉ざされているが、兵士たち、吸い込まれるように扉を通り抜けていく。

○病院・階段室の中

扉をすり抜けて現れる兵士たち。階段を上っていくが、ここでは足音は聞こえない。

○病院・ある階のナースコールセンター

その前を兵士たちが通り過ぎていく。夜間勤務の看護師数名が立ち働いているが、兵士たちの姿は見えていない。

看護師の一人が何かを感じたのか、

手をとめて辺りを見回すがなにも見えない、変わりもない。

だが、兵士たちはここでも看護師たちのマスクが気になり、一瞬立ち止まって注視している。

○病院・廊下

廊下が長く伸びている。

兵士たちが進んでいく。

○病院・病室の前

兵士たち、やってきてある病室の前で立ち止まり、中の様子を窺う。

○病室（深夜）

個室のベッドに老人、水野信彦（96）

が寝ている。

親族がひとり付き添っているが、看護師が来て何か告げると仮眠のためか、頷いて部屋を出ていく。

入れ替わるように、兵士たち、病室に入っていく。

水野に向かい、一斉に敬礼をする。

○病室内

兵士たち全員が病室の中に入り、直立して信彦を見守っている。

この時、兵士たちに見える水野は、ベッドの上で正座をしている。

小隊を率いる島村（27）が穏やかに声をかける。

島村小隊長「水野。おい、水野一等兵」

目を向けて島村を認め、やや間をおいてからはつとなり身を正す水野。

水野「はい、水野一等兵であります」

島村小隊長「ウム」

小隊の若い兵士たちと老人水野が少しの時間、見つめ合う。

島村小隊長「(苦笑いを浮かべて) 貴様、

老けたなあ」

水野「はい、生き永らえております。今年、九十六歳になりました」

○散開して進む小隊 (回想)

南方の戦地。

銃を構え、散開して用心深く前を窺い、進んで行く小隊。

○密林に行く小隊 (回想)

密林を進んでいく島村小隊の兵士たち。

水野もいる。みんな若いが、誰もが疲れている。

スコールが小隊に降りかかる。

○戦う小隊 (回想)

粗末な集落に激しい銃撃を浴びせる島村小隊。

粗末な家から反撃してくる地元民ゲリラ。

家を飛び出して逃げようとする男、女を狙撃する。水野も撃つ。倒れる男、女たち。

○休息する小隊（回想）

座り込み、膝を抱えて目を閉じ、わずかな休息をとる小隊。

至近距離で炸裂音が響く。

飛び起きて、また戦闘に入っていく小隊。

○密林を進む小隊（回想）

激しく疲労している島村小隊の兵士たちが進んでいく。

道端に五、六歳の女の子がひとり、座り込んでいる。

傍らに母と思われる女性がこと切れたまま放置されている。

黒く汚れた少女の顔、着ている服は焼けただれ、手に火傷の傷が見えて

いる。

小隊は通り過ぎるが、水野は立ちすくんでしまう。

女の子の瞳が水野を見据える。

水野、動けない。激しく動揺する。

○南方戦線戦場（回想）

激しい米軍の艦砲射撃が続く。

光る弾道。大地を揺らす爆発音。

○戦う小隊（回想）

激しい戦闘を展開する島村小隊。

命令、指示、怒号が飛ぶ。

間断ない銃撃を受けて動くことさえできない小隊。

砲撃を受ける。逃げ惑う小隊。

兵士の悲鳴。絶叫。

○敗走する小隊（回想）

ぬかるみに膝までつかって敗走する小隊。

上空から敵の機銃掃射が襲う。

悲鳴、絶叫が続く。

動けなくなつたひとりの兵士が倒れこむ。

他の兵士が手を添えるが動かない。

水野たち、その兵士を木の根元に移し、先へと進む。

兵士「たのむぞ〜」

水野、そんな声が聞こえた気がして、振り向く。

絶命した兵士が木の根元で動かない。

○病室内

水野の耳に「たのむぞ〜」の声がある。ちらちらから響いてくる。

ベッドに正座している水野、かすかな声を絞りだす。

水野「自分だけが生き残り、申し訳なく思います」

島村小隊長「ウム、——だが親御さんは喜んでくれたろう」

水野「（小さく）——はい」

○水野の家（回想）

畑の中にある水野の生家。

復員してきた水野（22）がボロボロの姿で生家の前に立つ。

飛び出してきた母が縋り付き、声を上げて泣く。

父は水野を抱き寄せ、肩や背中や胸を拳骨や平手で叩く。

言葉にならない声を上げて泣くばかりの母。生きていることを確かめるように水野の体を叩き続ける父。

言葉もなく、表情も薄く立ち尽くす水野、ただ頬に涙が流れる。

落命していく戦友たちの「たのむぞ、たのむぞ」の声が宙を舞って、水野に絡みつく

○病室内

ベッドの上に正座をしている水野。

その頬にも涙が一筋光る。

島村小隊長「貴様は俺達のことを忘れずにいてくれた。貴様が供えてくれた酒はいつもうまかった。鰻頭も礼を言う。いつも俺たちのことを背負って生きてくれた。

——貴様に礼を言いたかった」

水野「あ、いや、それは——」

島村小隊長「お前が生き続けてくれたことは——俺たちの思いでもある。よくぞ頑張って生きてくれた」

水野「あ、はい、しかし——」

若い兵士、西川（20）と中山（20）が一步前に出てくる。

西川「水野、俺のこと、分かるか？ 同期

の西川だ」

中山「中山だ」

しっかりと向き合い、強く頷く水野。

西川「聞かせてくれ。この国はあれからどうなつたんだ？」

西川、声が大きくなる。

中山も身を乗り出す。

小隊長も強くは制しない。

中山「水野、聞かせてくれ。日本は、この国はいま、いい国になつたか？」

二人を見つめる水野。

水野「苦し気に、呟くように」——わからない
西川「——ど、どういうことだ？」

水野「いろんなことがあつた。長い時間が経つた。いろんな考え方がある。——俺には分からん」

中山「いい国になつたのか？ 幸せではな
いのか？」

水野「——分からない。豊かにはなつた。

何でもある、何でも買える。みんな、いい家に住んで、いい服を着て、うまいものをいっぱい食べることできる。テレビがあつて、何でも見れる」

西川「(嬉し気に) お〜」

中山「そうか、そいつは良かった」

水野「だけど——豊かにはなつたけど——」
西川「ん？」

水野「豊かだけど、幸せかどうかは、分からんし、人それぞれだ」

中山「そりゃそうだ、誰もみんなが幸せと言うわけには——」

水野「いや、——国のことだ。日本がどうかということだ。日本はいい国になつたか、俺にはそれがわからん。命を投げ出したあんた達が考えるようないい国にな

ったのかどうか」

西川「水野、貴様はどうなんだ？ 何をどうしたんだ」

○水野の回想（和江の家・夜）

町はずれにある和江の家。少し離れたところで水野（20）と和江（18）が見つめ合っている。

暗闇の中に、二人の白いシャツがうつすらと浮きがって見える。

和江「どうして志願なんかするの？」

水野「——わかるだろ」

和江「（必死に）どうしても行くの？ どうしても」

水野「——ああ」

和江「死なないで。絶対に死なないで」

水野「——ああ」

思いつめた表情で、水野に抱きつく和江。

強引に水野の手を引いていく。

○水野の回想（和江の家の道具小屋）

和江、やって来て水野を引き入れる。

和江、二、三步離れて、振り返る。

見つめ合う二人。和江の目が激情に溢れている。

和江、自らシャツを脱ぎ、モンペを脱ぎ、下着を脱ぎ捨てていく。

暗闇の中で白い裸身をさらす和江。そして、水野に縋り付き、激しく唇を押し付ける。

水野も激しく応えて和江を抱く。

倒れ重なり合う水野と和江。

○水野の回想（和江の家）

その焼け跡に立っている水野（22）。
復員したままのボロボロの姿で、和江の家の焼け跡を呆然と見つめている。

○回想（水野の日々）

ごった返す闇市マーケットをギラギラした目の水野が荒々しく歩いていく。

水野、険しい表情で人にぶつかりながら夜の街をさまよっている。

水野、酔って見知らぬ男と激しく殴り合っている。

肩で息をしながらも、やめようとなない。

「畜生！ 畜生！」と叫びながら、暴れている。転げまわっている。

○回想（場末の街角）

夜の街、場末をさまよい歩く水野。

赤い提灯を出した何軒もの飲み屋が軒を連ねている。

薄暗く、濺んだ街角に客の声、女たちの嬌声が響いている。

水野、その一軒一軒の暖簾を荒々しく跳ね上げながら覗き込んでいく。

水野、険しい表情で夜の街をさまよっている。

明らかに春をひさぐ生業の女たちが客引きのため街角に立ち、男たちに声をかけている。

水野、誰かれなく女たちの顔を確かめていく。

ふと一人の後ろ姿に目が留まる。

一瞬振り返った女は和江だ。

その瞬間、駆け寄っていく水野。

気配に振り向いた和江、駆け寄ってくるのが水野と分かり、悲鳴を上げる。

逃げる和江を追いかける水野。

あっけなく追いつき、抱きすくめる水野。

手をつかみ、乱暴に連れていかうとする水野。激しく抵抗する和江。

それを見ていた屈強な男が数名、ゆつくりと二人の前に立ちほだかる。

間を置かず男たちに殴打され、足蹴にされる水野。

和江の叫びが夜の闇を裂く。

○回想（夜の街）

水野、ふらつきながら歩いていく。

顔が腫れ上がっている。

○回想（満員の列車の中）

満員列車の中、折り重なるように疲れた男たち、女たちが乗っている。

誰もが土気色の顔で目を閉じている。

汗みどろで立っている水野、大きなリュックサックをふたつ、守るように胸に抱き、列車の振動に身を任せている。

○病室内（夜）

揺れる列車の中。疲れ果てた様子の乗客男たち、女たち。

水野、西川、中山の音がダブる。

西川の声「お前は何をしたのか？——本当にこの国を作って来たか？」

水野の声「——（声を絞り出すように）戦争から生きて帰って、思うことも言いたいことも山ほどあった。だけど、どう考えて、どうやって、何を言えればいいのか分からん」

苦しい息遣いで話す水野。

水野の声「さっぱり分からん。情けない。自分が情けなかった——誰に言えればいいのかもわからん。何をやればいいのかもわからん」

中山の声「貴様は、誰かに何かを伝えたか？戦争のこと、俺たちのこと、あの血だらけの戦場のこと——」

○水野の回想（畑）

水野、汗まみれになって鍬を振り上げ、畑を起こしている。

水野の声「生きて帰ってきた奴は、相手にされなかった。ご苦労様でしたとは言いが、腹の中じゃ、俺の息子は死んだ、私の夫は帰ってこない。それなのにあんた

は——と責められるような毎日だった」

げる。

○寺

お寺の前に来て、中を窺う水野（30代）。

やがて境内に入り、一步一步本堂に向かう。しやがみ込み、本堂に手を合わせて祈る。それを見ているこの寺の老住職。

○病室内

ベッドに正座する水野。取り囲むように立つ兵士たち。

水野「ただ、がむしやらにやることしか出来なかった」

水野、ベットに両手をつき、頭を下

西川「（一転して悲し気な声になって）水野、

悪く思わんでくれ。戦死した俺たち、

——やっぱり悔しい。せめて言わせてくれ、

繰り言だ、心残りと言う奴だ」

頭を垂れ、力なく頷く水野。涙が落

ちる。

○水野の回想（砂利道）

水野、戦友たちに話し始める。

水野の声「ただ、がむしやらにやることし

か出来なかった。生きることが先で——」

水野、野菜畑で汗にまみれて、作業

をしている。

砂利道を自転車に乗った水野が行く。

自転車の前と後ろに野菜を山のように積み、砂利道をよろけながら進む水野。

細く伸びる砂利道に埃が舞い上がる。

街の中、主婦たちを相手に野菜を売っている水野。

主婦たちの逞しいやり取りに圧倒されてる水野。

不器用に頭を下げている。

○水野の回想（土木工事現場）

道路工事の作業現場。屈強な男たちが働いている。

三十年代半ばの水野、ダンプカーを運転してくる。

トラックの向きを変え、ダンプの荷台を跳ね上げる。

勢い良く滑り落ちる砂利。土煙が舞う。

現場に続く畑では農業者が地を這うように働いている。

別の工事現場。

新しい農道を切り開いている道路工事。

ツルハシを振り上げる水野、スコップを持つ水野。

裸の上半身に汗が溢れ出る。

水野「何でもやっただです。——何も考えず、何でもやっただです」

水野 自分の拳を握りしめる。

水野 「三十過ぎてから、トラックの運転免許を取りました。それで建設会社に雇ってもらって、東京にも行きました。出稼ぎです。オリンピックの工事があって、大変で、忙しくって——。日本中から人が集まって——。仕事は山ほどあったです」

道路工事現場の責任者らしい男、岩本（40代後半）が声をかける。

岩本 「水野、この間話した東京行きな、オリンピック工事だけだよ。お前も行ってくれないか」

水野 「ああ、いいですよ」

岩本 「あっちじゃ、トラックが全然足りな

いんだってよ。まあ、稼ぎにはなるさ」

水野 「わかりました」

岩本 「出稼ぎはきついけどよ、半年くらい、覚悟しておいてくれや」

○水野の回想（オリンピック工事が進む街々）

至る所が工事現場になっている東京の街。

昭和三十九年のオリンピックに向けた建設工事が激しい騒音とともに進められている。

人を押しつけて響く甲高い金属音、舞い上がる土煙、車の渋滞、それを縫うように行き交う人々。

天を覆うような高速道路。

昼夜の区別がない地下鉄工事。

ビル工事作業のクレーンが空に突き刺さるように立ち並ぶ。

圧倒的な建設機械の存在感が膨れ上がっている。

○作業員宿舎外観

トラックの発着基地に続いて、小さく粗末な造りの工事作業員の宿舎がある。

トラック発着基地の駐車場に戻ってくるトラック、出かけるトラック、そのヘッドライトの光が忙しく交差する。

小さな粗末な建物の中、二段ベッドを備えた六畳ほどの狭い部屋が続いている。

細い廊下の行き止まりに食堂のような小さな空間があつて、男たちがたむろして休んでいる。

岩本を中心に三、四人の男たちが集まつて酒を飲んでいる。

50代の男A、Bがいる、水野もいる。

男A「あんた、戦争は？」

岩本「ああ、行つたさ——、最後には満州で捕虜になつて、シベリアに送られて——」

男A「シベリアか？ そりゃ大変だったね

え。——最悪だ」

岩本「戦争もきつかつたけどシベリアでの三年の方が辛かつたなあ。いまでも夢に

○作業員宿舎の中

出てくるもな」

男たち、黙々と酒を飲んでい

岩本「だけど帰ってこれたつちゆうことは、

俺にも運が残っていたんだろな——」

男たち、酒を注ぎ合い、それぞれの

重い過去を思い出している。

岩本「フン（小さく笑う）それでさ、笑う

かもしれねえけど、やっぱり、戦争で負

けたけどさ、そこから立ちあがるという

か、俺なりにこの国をしつかり守ってい

かなきゃって考えた訳よ」

一様にうなずき合う男たち。

岩本「フン——最初はな」

男B「戦争から生きて帰った奴は、みんな

そうだよ。——俺だってそう考えた」

岩本「難しいことはわからんけど、死んで

いった奴らに申し訳ないって、そんな気

持ちが頭の中にへばりついて離れない」

水野「自分は、戦地は一年ちよつとだった

けど、おんなじ気持ちです」

岩本「死んだ戦友に申し訳ないってさ、そ

ればっかり考えていたなあ。だけど、何

をすればいいのか分からねえ」

水野「そうっすね」

酔った男たち、同じ思いから頷いて

いる。

岩本「政治家じゃねえからな。結局、農家

の畑の改良や、家や道路を作ったり——」

水野「自分もそうっす。生まれ変わる日本

のために——なんて思ったけど、結局は

汗をかいて、それだけで精一杯だったの

かも知らんです。——自分をごまかして

いたのかも知らんです——」

男たちの同じ思いが空間を漂っている。

写真のインサート。

昭和39年東京オリピックを前にした突貫工事の写真をインサート。

(写真) 東京の街を縫って伸びる高速道路の建設現場。

(写真) 新幹線線路工事の威容。

(写真) 国立競技場の建設工事現場に集結している建設機械とトラックの群れ。

(写真) 夜間の地下鉄工事。地下の掘削現場。

(写真) 林立する建設中のビル。堀

に囲まれた建設現場。

(写真) ヘルメットを被った現場労働者たち。

(写真) いろいろな工事に押しつぶされるように歩いている人々

(写真) 広場に設置されたテレビ中継放送に集まる群衆。

(写真) テレビの画面、プロレスリングの闘い。歓声が聞こえてくる。

水野「この頃、思うんだけど。いや、考えが間違っていたら教えてください。あの、オリピックっていうのはどうなんすかね。高速道路や新幹線やビルを建てるのが戦後の復興かどうか、自分には

分かんんです。——分かんけど、そう
だとも思えない」

酔った男たち、酒をあおり、うなず

き合っている。

男A「そうだよな、毎日、ダンプで走り回
って、渋滞でイライラして——下請けで
出稼ぎっていうのは体もきついし——俺
もさ、この頃、なんか分かんなくなつて
きたな」

男B「オリンピック競技場、新幹線、地下鉄、
高速道路——結局のところ、東京中を掘
り起こしているけど、新しい日本ってこ
ういうことじゃないんじゃないかねえ」
水野「地下鉄なんて、夜も昼もなく工事中
だし、東京の人は掘った穴で道路がなく
なつて、その上に敷いた鉄板の上をおつ

かなびつくり歩かなきゃならんし——」

岩本「誰のためなのかねえ。誰が喜ぶのか
ねえ。考えてみりゃなんかおかしいよな。

ちよつと考えてみればさ」

男B「他にやらなきゃならんことがあるん
じゃねえのかな、って思うよな。オリン
ピック、何でもオリンピックでいいのか
な。いや、オリンピックは良いけどさ」

男A「戦争で死んだ戦友や兵隊たちは、ど
う思っているのかなあ」

男たちの疲れた静寂が漂う。

水野「——岩本さん、俺、函館に帰ろうと
思うんだけど——」

岩本「ん？」

水野「いや、二、三日前、函館に行ってきた
という人から聞いたんすよ——函館山に

行ってきたそうです」

岩本「おお、函館山か」

水野「少し前にできたロープウェイに乗っ

て、夜景を見に行つたそうです」

岩本「俺はまだ行つたことがないな」

水野「自分もです。——ロープウェイで行けるようになっていて、行くと夜景が広がって、すごく綺麗だつて」

男A「ああ、それって俺も話では聞いたことがあるよ」

水野「その人が言つてたんだけど、——ちつちやな灯りが集まつて確かに綺麗だけど」

岩本「その割には、ロープウェイの料金が

高いつてか？」

小さな笑いが生まれる。

水野「いや、——その灯りの下で、みんな

が幸せなんだろうかつて。その人も戦争から帰つて来ただけけど——」

岩本「函館の光なんて、どれも小さいよなあ。それに比べりゃ、東京なんて夜をなくして一日中、昼にしなけりゃならんみたいだ。いつもピカピカに明るくつて、まるで光の洪水だ」

男B「だけど少しも綺麗じゃない」

岩本、同じ気持ちからニヤリと笑う。

岩本「東京のでかい光にゃ、若い奴らが浮かれる」

男B「浮かれて田舎を忘れるつてか」

水野「岩本さん、自分、——函館に降りたんです」

岩本「——ウム」

水野「函館で、みんなで、子供らや女房と

一緒に——」

岩本「そうか——おれもそうするかな——

そのちっちゃい灯りでも見てみるか」

見つめている水野。

○病室内（夜）

水野と西川と中山だけの病室。

静かな時間が流れている。

○函館、西波止場（水野のイメージ）

西波止場から見える函館山の全景。

緑に包まれている。

遠い昔の連絡船の汽笛がボウと聞こ

えてくる。

*** 時間経過 ***

水野、身をよじり、小さなうめき声

をもらす。

水野、横になろうとする。

西川、中山が先刻までの口調とは違

い、優しく手を添えて動きを助ける。

水野、ゆっくりと横たわる。

*** 時間経過 ***

○函館山からの夜景（回想）

水野、眼下に広がる夜景を見ている。

ひとつひとつの灯りがそれぞれの色

をもって光っている。

連なって広がる函館の夜景。

眠る水野。

兵士たち、全員が部屋に入って、見守っている。

○水野の夢

復員した水野、生家の庭に立つ。

父は水野を抱き寄せ、肩や背中や胸を、確かめるように叩く。

言葉にならない声を上げて、泣くばかりの母。

水野の体を確かめるように叩き続ける父。

南方戦線、島村小隊の兵士たちが行進していく。

道端、こときれた母の傍らに女の子

が座り込んでいる。

女の子の瞳が水野を見据える。

水野、立ち竦む。

○病室内（夜）

ベッドに横たわる水野、苦し気な表情で夢を見ている。

大きく深い息をする。

看護師が急ぎ足で部屋に入ってくる。

部屋に置かれた機器をチェックし、

脈拍をとる。

医師を呼ぶ。

見守っていた西川の目に涙が浮かぶ。

西川、敬礼を送る。中山もそれに倣う。

医師や看護師、家族が慌ただしく病

室に入ってくる。

静かに水野が逝く。

兵士たち、消えている。

っている。

家の中からお経の声流れ出ている。

○水野の家・和室

和室に祭壇が設えられている。

菩提寺の住職、西本（60代）が枕経

を上げている。

親族たちが集まり、合掌している。

部屋の入口付近に小隊長と西川たち

数名の兵士が立っている。

枕経が続く。

○総合病院・外観（深夜）

深夜。各階に小さな灯りを纏った病

院の建物がある。

兵士たち、広い駐車場の街灯の下に

いて病院の上階を見上げている。

○現在・水野の家（朝）

農業も兼業している風情の水野の家
があり、前庭が広がっている。

庭先に五〜六台の車が止まっている。

兵士たち、玄関前の庭に整列して立

*** 時間経過 ***

枕経を終えた西本住職が集まっている遺族に語り掛けている。

西本「亡くなられた水野信彦さん。昭和の直前、大正十五年のお生まれ、戦争の影が濃くなつていく時代に成長され、若くして戦争に行かれたと伺つております。幸いにも復員されましたが、敗戦後の一変した世の中で、そりゃ口では言いきれない苦勞をされてこられたと思います。正に何と言うか、昭和を生き抜いてきた」と言えるんじゃないかと思えますね。水野さんとは先代住職の時から長いお付き合いですので、水野さんのことは私もかなり前から存じ上げておりました。――先代住職にはいつも心の内をお話しになつていたようでして、水野さんのことは先代住職からいろいろと聞くことができました」

親族と兵士たちが聞き入っている。

西本「ご存じかと思いますが、水野さんは若いころからつい最近まで、毎月、月に二度三度、お寺にお参りに来られていました」

○お寺外観

お寺の前に来て、中を窺う水野（30代後半）。

やがて境内に入り、一步一步本堂に向かう。やがて、そこにしゃがみ込んでお祈りをする。
先代住職がその姿を見ている。

○お寺・本堂（別の日）

水野（40代）、広い本堂に入り、本尊

にお参りをしている。

持ってきた酒の瓶と饅頭などのお菓子を供える。

西本の声「誰のお墓というのではなく、いつも本堂で長い時間お参りをされていました」

時折顔を上げ、本尊を見つめ、また手を合わせて祈る水野。

○お寺・本堂（別の日）

春の日差しが本堂にも入り込んでいく。春の日差しが本堂にも入り込んでいく。

老住職（70代）と水野（50代）がのんびりと語り合っている。

傍らに小学校校長 寺島がいる。

西本の声「小学校の校長先生から、子供た

ちに戦争のことを話してやって欲しいと頼まれたそうです。でも、水野さんはこれを断り続けたんだそうです」

水野「校長、あんたとは同級生だけど、それだけは悪いけど勘弁してくれ。俺には出来ん」

寺島校長「そう言うと思ったよ、でも、何とか頼みたいんだ。他にふさわしい人がいないんだよ」

老住職が見守っている。

水野「考えてもみるよ、校長。戦争なんてよ、誰が、いつ、何のために始めるんだ？

それなのに戦争で男も女も死んでいく。始めた奴は戦場には行かないよ、きつと。

——こんなこと、子供たちに話しようがないよな、実際」

老任職と校長。黙って聞いている。

水野「話して聞かせる。しかも子供たちだ。

どう考えても俺にはその資格がない」

小さく頷いている寺島校長と老任職。

水野「——話しようがないんだよ、自分が

わかっていないことだものな。——で、な、

はつきり言ってな、この国に戦争があつ

たことも、いつかは忘れ去られるさ。今

じゃもう、戦争を知らない若い連中がい

っぱいいるものな。そいつらが父になる、

母になるんだ。その時、日本はどんな国

になつていゝかな。誰も分かん。——

だからさ、あんたが頑張ったり、俺が話

をしたりすることは違ふんじゃないの

かって思ふわけよ。俺がちよつと話して

どうなるものでもない。——(少し激して)

第一にさ、国はどうしてんだよ。新しい

国とか復興つて言うけどさ、戦争を始め

たのは国だろ？ 始めた責任つて言うの

があるんじゃないの？」

○お寺・本堂の縁側(別の日)

本堂の縁側に座り、老任職(80代)

と水野(60代)が秋の陽を浴びながら、

話している。

西本の声「ある時、先代が、どうしてお寺

にお参りに来るのか」と聞いたんだけど、

答えてくれなかったそうです」

秋の日差しが境内の色づいた木々の

葉に柔らかく注いでいる。

境内を見つめている老任職と水野。

○お寺・本堂（別の日）

西本の声「その時は答えてくれなかったそうですね——。しばらくして冬が近くなつた頃、ぽつりとつぶやいたそうです。戦争でたくさんの方が死んだけど自分は生き残ってしまった。——俺は何をすればいいのか、考えてきたけど、分からなかった——と」

祈り続ける水野。冬が間近い本堂。

西本の声「水野さんは住職の前では子供のように素直で、弱くて、真面目で、——だから先代の住職には、水野さんは自分だけ生き残ったことで、何と言うか、人一倍戦争を背負っていたようにみえたんだそうです」

○お寺・本堂（別の日）

水野と住職、お供えの酒を下げてきて、酌み交わしている。

○通夜齋場

小さな齋場に設けられた簡素な祭壇に水野の遺影が飾られている。

20〜30人の親族たちがいる。

兵士たちは全員が後方に立ち、通夜に臨んでいる。

兵士たち、参列者や住職のマスク姿が気になっている。

西本が読経後の法話をしている。

西本「先代住職も心配していたのでしよう。何度か、信彦さん、あんた、ずっと戦争を背負って、いや生き残ったことを後ろ

めたく思つてきたようだけど、もう楽になりなさい。——戦争を始めたのはあんたじゃないんだ——そう言うのがやつとだつたと申しておりました」

静かな齋場。静かな参列者たち。

西本「何か大変重いものを自分の胸の中に持たれていたんだと思うばかりです。もう十年ほど前になりますか、私にもある時、胸の内を話されたことがあります」

○祭壇・遺影

生真面目そうな老人の遺影がある。

水野の声「住職よ、儂にもやつとわかつてきた。——国や世間ちゅうのは死んで守るものではない。生きて頑張つて築くものだねえ。(小さな、力のない声で) 今、

生きている者の責任ちゅうもんがある。——だけど、それはわかっているけど、だけど、儂はな、何もできんかったんだ」

法衣の西本(六十代後半)、振り返つて遺影をみつめる。

西本「そんなことはないですねえ。ご苦労されて、お仕事に精を出されて、ご家族を大事にされてきました。それでも、何もできんかった」との思いから、お寺に來られて祈ることしかなかつたんだろう、と思うところです」

立っている兵士たち。

○齋場控室(通夜のあと)

通夜のあと、齋場に隣接して部屋があり、そこで寛いでいる親族たち。

子供たちは一様に壁際に座り、会話もなくスマホをいじっている。

ある種、異様な光景である。

大人たちも仕事なのか何やら偉そう
な口調で電話をしている。

男C「朝の報告と違うじゃないか。なに考
えてんだ、お前は」

男C「それは当然だろうが。いい、もうい
い。あした、夕方には会社に出るから――」。

その時に聞く」

男D「やることやっていないだろう、お前。

いつも同じことを言わすんじゃないよ。

いいな、明日の夕方までに、初めからの
経過をまとめておけ、いいな」

男D「あ、それからな、あさっての午前中
には先方に説明に行くから、アポとって

おけ。忘れんな」

別の男も電話をしている。

男E「いえいえ、ご心配なく。はい、何し
るもう96歳でしたから。12月には97歳な
んで、ですから、はい、家族葬で――。
私は遠縁なんです。ハイ。あ、ハイ。
お気遣いありがとうございます」

沈黙と大声の控室。

その部屋の一角に集まっている久志
(長男69)、英二(次男67)、民子(長
女65)、哲夫(久志の子。水野の孫45)、
道雄(久志の次男、水野の孫43)、良
介(英二の子、水野の孫40)、その傍
らにひとり若い舞子(民子の孫、水
野のひ孫16歳)がいる。

兵士たち、お棺の周りに立ち、見守っている。西川が呟くように語り掛ける。

西川「水野、良かったな。子供や孫や、ひ孫まで、みんなに見送ってもらえたんだ。暖かい。お陰でな、俺たちも温もったよ。ここはジャングルじゃない。塹壕でもない。敵の砲撃もない。——水野、良かったな」

○斎場控室・久志たちの所

車座になって、お茶やビールを飲んでる縁の人たち。

久志「あまり話をする人じゃなかったけれどな——」

民子「でも、いつも言っていたわねえ、喧嘩はするなって」

久志「うん、よく言われたなあ」

英二「そうは言ったって、こっちは子供だもんな、兄貴とは毎日、喧嘩だったよな」

久志「理由なんつてないよな、いつも——」

哲夫「あれ、覚えているか？ 小学生のころかな、道雄と良介がめっちゃ叱られたあことがあったよ、なあ」

良介「うん、いまでも覚えているよ」

○水野と孫たち（回想）

水野に叱られている哲夫、道雄と良介。

激しい怒りの表情の水野。

民子の声「何やったの？」

良介の声「いや、いつものことだと思っよ。」

39

なんで喧嘩になったかなんて、訳があつたかどうかも分かんないよ」

哲夫の声「覚えてるのはさ、あの時の大じいちゃんの顔だよ。すげえ怖かったよな」

良介の声「喧嘩ばかりしくさつて。それが戦争になるんだ」

道雄の声「喧嘩をして何か解決したことあるか？つて」

英二の声「そうは言つたつて、こっちは子供だもの兄貴とは毎日、喧嘩だつたよな。理由なんあつたかどうか。でもあの時は大じいちゃんの血管が切れるんじゃないかと思つた」

形相激しく、叱り続ける水野。

○水野と孫たち（別の日）（回想）

二十代に成長している孫たち、哲夫（27）、道雄（25）、良介（22）と水野（70代）がいる。水野を囲んで酒を飲んでいる。

楽しそうな席である。

水野が機嫌よく話をしている。

道雄の声「よく言われたよなあ。ボケてんじゃない！つてな」

良介の声「楽しむな、楽しむんじゃない。楽しむこと覚えたら、底なしだぞ」

道雄の声「道を間違えるな。やり直し出来るつていうけど、そんなもんはない」

良介の声「自分たちがどれほど幸せか、分かつてんのか！」

道雄「分かんなかったら、毎日、母さんの

やっていることを見てみる」

哲夫の声「少しは考えろってな」

少し真剣な話になる哲夫。

哲夫の声「でもな、実際そうかもしれない

なあ、大じいちゃんから見れば、俺たち

甘いんだろうな」

○斎場控室・久志たちの所

苦笑いの哲夫、道雄、良介たち。

道雄「ここしばらくは、叱られていないな」

民子「そりゃそうだろうよ。みんな四十過ぎて、

子供も大きくなって、大じいちゃんだっ

て遠慮するだろうさ」

哲夫「見放されたのかもしれないよ。こい

つ等みんな、駄目だなんてね」

良介「そうかも知れないね」

哲夫、道雄、良介、そして民子、小

さく笑う。

民子「でもさ。いざそうなってみると、寂

しかったんじゃないのかい？」

哲夫「——ホント、寂しいよね。——俺、

実はさ、大じいちゃんが亡くなって、結構、

堪えているんだ」

道雄「俺もだ」

良介「それこそしつかりしろって、叱られ

るよ」

苦笑いしながら頷く孫三人と民子。

揃って通夜の祭壇に目をやる。

水野の遺影がそこにある。

○斎場控室・久志たちの所

民子の夫、有田が加わってくる。

有田「お疲れさんでしたね」

久志「いやいや、君こそ。今日は急なことで」

英二「ありがとうさんでした」

有田「いやいや、なんもさ。お、舞子もいたか。

何でここにいるんだ？　こんなオジサン

ばかりの話しなんか退屈だろう？」

舞子「ううん、面白い。大じいちゃんのこと、

私の知らないこと、いっぱいあつて——」

有田「(舞子に) そうか、良かったな。——

それじゃよ、今日は大じいちゃんの供養

つてことで、とつておきの話をしてやろ

うか」

舞子「うん、してして！」

有田「(笑いながら) 舞子の祖母ちゃんのこと

となんだけどな」

舞子、民子を見上げる。ニコニコ笑

つて首をかしげている民子。

みんなも期待で笑顔になっている。

有田「大じいちゃんがある日な、突然、全

く突然にな。おい、俺の娘を嫁に貰え」

つて」

舞子「えつ、マジッ！」

有田「ああ、マジッ！だ。幸せにしてやつ

てくれて。それだけ言つてな——」

舞子「はあく。超びっくりじゃん！」

哲夫「大じいちゃん、有田のおじさんと一

緒の会社だったろ、昔はな。で、真面目

ない男がいる、仕事もできる。絶対、

民子の婿さんだつて言つてな」

舞子「祖母ちゃんはどうしたの？」

民子「初めて会つた時、良い人だと思つたさ。

運命の出会いっていうのかい？」

舞子「うわっ」

有田「とういうわけで、今ここに舞子がいる
ってことだ」

舞子「ふん。なんか素敵！」

舞子、深い思いに浸っている。

有田「どうだ、舞子。いい話だろ？」

舞子「強く頷く」うん！」

民子「大じいちゃん、舞子をとつても可愛
がってくれたもねえ」

舞子「うん、私、色々なこと覚えている、
大じいちゃんのこと。——一番覚えてい
るのは、私がおなかを壊して入院した時
——」

民子、意外そうな顔で舞子を見る。

民子「ホントかい？ 入院したのって、お
前がまだ幼稚園の頃だろ？」

舞子「うん、——でも憶えている」

○水野と幼い舞子・畑（回想）

水野、野菜の実りがいっぱい畑で
収穫作業をしている。

水野の周りで走り回っている幼い舞
子。

水野、トマトやイチゴなどの収穫を
袋に詰めながら、

水野「さあ、舞子、とれたぞ。これ食べると、
美人になるぞ」

と言いながら振りむくと、舞子がう
ずくまっている。

水野「どうした？ 舞子！」

舞子「お腹、痛い」

水野、咄嗟に駆け寄って舞子を抱き

上げ、ヨロヨロと走り出し、大声で人を呼ぶ。

さんが言っていたぞ」

舞子「もう、痛くないよ。どこも痛くない。お腹も痛くないよ」

○水野と幼い舞子・畑、別の日(回想)

同じ畑に水野と舞子がいる。

元気な舞子、穏やかに見ている水野。

水野「そうかそうか、良かった、よかった。頭——大じいちゃん、びっくりしたぞ。頭が真っ白になって、クラクラした。本当に心配だった」

○水野と幼い舞子(回想)

水野(85)と幼い舞子(5)が日当たりのいい部屋にいる。

舞子、ふとおもちゃ遊びの手を止めて顔を上げる——。

舞子、おもちゃで遊びながら水野と

話をしている。

水野「舞子は偉かったなあ。病院、頑張っ

水野、突然の舞子の言葉に戸惑い、動揺する。

たもな」

舞子「うん、頑張ったよ」

水野「(驚く)うん? どうした?」

水野「もう大丈夫だ、全部直った。お医者

舞子「テレビで、なんかやっていた。——大じいちゃん、戦争って知っている?」

一瞬、舞子を見つめる水野。

○女の子（フラッシュ）

水野「（落ち着きを取り戻して）——ああ、

南方戦線の戦場。

知っている」

女の子が座り込んでいる。

舞子「戦争、したの？」

傍らに母と思われる遺体がある。

水野「——ああ。昔のことだ」

汚れた顔、手に火傷、焼け爛れた服、

舞子「怖かった？」

ボロボロの服を身につけた女の子の

水野「——ああ、怖かった。本当に怖か

瞳が水野を見据える。

った。だけどな。いつか段々平気になっ

ていた。その方がもつと怖かった」

○水野と幼い舞子（フラッシュ）

舞子「大じいちゃんも、鉄砲撃ったの？」

水野と幼い日の舞子。

水野「——ウム」

舞子を見つめる水野の顔、次第に表情が変わる。

○戦う小隊（フラッシュ）

激しい戦鬪を展開する島村小隊。

次の瞬間、水野が激しく泣き出す。

銃撃音、怒号、悲鳴が交錯する。

号泣する水野を見つめている舞子。

泣く水野を見て舞子も泣き出す。

○女の子（フラッシュユ）

戦場で——。

女の子の瞳が水野を見据える。

戦闘の音が遠くに聞こえている。

水野の声「（激しく泣きながら）小さな女の子がいた。舞子と同じくらい歳の。泣く）戦争で死んだ母さんの側にいた。坐っていた。（泣く）じっと儂を見ていた。どうして母さんが死んだんだ、と言われたようだった。（泣く）あの子はどうなったのか。——酷い話だ。酷い。戦争はだめだ」

泣き続ける水野と舞子。

○斎場控室・久志たちのところ

久志たち、哲夫たちが舞子の話を聞いている。思い出して泣いている舞子。

誰もが深い思いに浸っている。

久志「舞子、辛いけど、いい話を聞かせてくれてありがとうな」

大人たち、みんなが同感の表情である。

哲夫「そうか、そんなことがあったのか」

民子が舞子の手を握っている。

民子「大じいちゃんの泣き顔見たの、舞子だけだね、大じいちゃん、舞子と一緒に思いつきり泣けて、良かったんだよ、きつと——それで思い出したんだけど、さつきの話——」

哲夫「うん？」

民子「大じいちゃんが叱らなくなった、って」

哲夫「ああ」

民子「大じいちゃんの定年じゃないけど、

仕事を辞めた時、みんなでお祝いのパー

ティをしたろ？」

○水野を祝うパーティ（回想）

良介の声「ああ、あの時は大じいちゃん、

珍しく酔っぱらったね」

水野、かなり酩酊している。

大声で話し、突然歌い出したりして

いる。

水野（78）「儂あ、土木の仕事はこれで卒業

する。明日からは農家だ、畑をやる」

英二（49）「そりゃいいけど、もう久志が親

分だし、大じいちゃんの孫の哲夫だって

ね、頑張っているよ。なあ、哲夫」

哲夫（27）「笑って）ああ」

水野「そりゃ分かってる。分かってる。ほ

んの少し、少しだけ、久志から、いや哲

夫の方がいいかな。畑の隅っこを貸して

もらってやるんだ。儂の次の人生の目標

ちゅう訳だ」

哲夫「大じいちゃん、いいよ。隅っこでな

くて、ど真ん中で手伝ってよ」

水野「そりゃダメだ。儂のほうが目立って

しまう」

笑いが起こり、座が盛り上がってい

く。

○斎場控室・久志たちの所

久志、英二、有田、哲夫たち、そして、

舞子が民子の話を待っている。

民子「あの日、あの後でね。私に言ったんだよ。〃民子。俺、がむしゃらにやって来たけど、これでよかったのかな? ってさ」

静かな、穏やかな空気が流れる。

久志たち、静かに杯を重ねる。

民子「あの時は父さん、大じいちゃん、酔っぱらっていたのに、妙に真剣にさ。そんなこと言ったんだよ。——良かったよ、二重丸だつて言っただけさ。そしたらね、なんか嬉しそうな顔してね。——笑つて、またすぐに酔っ払いに戻っちゃった。なんかね、父さんつて、いつも何かを抱えていたよね。でも、あの頃からかな、少し楽になつて、ホントに畑を始めたもん

ね」

有田「そりゃ、会社でもそうでしたね。どんな仕事でもそうだけど、特に道路工事、河川改良なんか若い人たちにいつも〃土木工事は国を作るんだ、国土建設だ。その気持ちでやれ〃って口癖のように言ってたよね。それがいつか言わなくなつて、気が付いたらいつもニコニコ笑つてたつて。昔、鍛えられた連中は不思議がつていましたよ」

兵士たち、やや離れている祭壇の周りから、舞子や有田の話を聞いていく。

○祭壇・遺影

控室から見える祭壇。

穏やかな水野の遺影の表情を見やる
久志たち。舞子、有田。

○齋場・ロビー

外は荒れた天気になり、雨が降りはじめている。

齋場の入口ロビーに出てくる哲夫、

道雄、良介たち。

雨が強くなり、雷鳴が響きはじめる。

哲夫「(雨と雷鳴を見やりながら)なんか叱られてるようだな、大じいちゃんに」

道雄「叱られること、何かあるのかい？」

哲夫「いやあく、別にこれというわけじゃないけどさ」

激しい雨を見ている哲夫たち。

哲夫「考えてみれば、俺たち、なんか甘い

んじゃないかって思うんだ」

道雄「へえ。どうしたの？ いつもと違うね」

哲夫「——俺なんかホントそう思うよ」

良介「なんか分かるな。大じいちゃん、昔から頑張っていたよな」

哲夫「何というか、耐えていたというのかな」

道雄「そうだな。大じいちゃんが生きて、

今死んで、戦争のあと苦労ばかりで——

俺たちそれをずうつと見てきたんだけどさ。——やつぱり、なんか考えなきゃな」

哲夫「昭和六十三年、平成三十一年、令和

四年だもんな。九十何年？ 戦争に行つて、帰ってきて、すべてゼロからやつてきたんだもな。——マジで凄いなと思うよ」

雨はさらに激しくなり、地面で水し

ぶきが乱れている。

雷鳴が響く。

齋場の外に出ていた兵士たち、その中で立ち続けている。

*** 時間経過 ***

舞子が弔辞のために、祭壇の前に立つ。

水野の遺影を見つめる。

○齋場・入口（朝）

一転して快晴の朝。陽の光が眩しい。

齋場近くの一角にひまわりの花が咲いている。

舞子「大じいちゃん。——じいちゃん、ば

あちゃん、お父さん、お母さん、おじさん伯母さんたちに代わって、そして孫、ひ孫を代表してお別れの言葉を捧げます。

○齋場・告別式

ささやかな告別式が行われている。

西本の読経が静かに流れていく。

兵士たち、会場の後方で一列になつて立ち、見守っている。

——大じいちゃん、みんな、とっても寂しいです。大じいちゃんがいなくなつて、とっても悲しいです。——（涙声になる）でも、大じいちゃん、舞子、ありがとうの気持ちをつぱいに込めて、お別れするね。（泣きながら）でも、お別れしても、大じいちゃんの姿はすぐ側にあります。

優しい声はいつも舞子に聞こえます。――

――大じいちゃん、お元気ですか？　いつまでも元気できてね。――お天気の良い日は、やっぱり、畑でたくさん野菜を作るんでしょね。大じいちゃんは毎日、畑で過ごしていましたね。そして、トウキビをくれましたね。トマト、スイカ、イチゴ、大根、白菜、キャベツ、エンドウ豆、芋、ニンジン、手品師のようになんでも出してきて、＼食べる＼って言って、＼これを食べたら美人になるぞ＼って笑ってくれましたね。ありがとう。本当に美味しかったよ」

○水野と舞子（回想）

畑に立つ水野、野菜を差し出す水野

が微笑んでいる。

○告別式

舞子の弔辞が続く。

舞子「大じいちゃんとよくお喋りをしたね。いっぱい遊んでくれたね。私の一番楽しい時間だったよ。それに、とても大事なことを教えてくれたと思います。――あの日のこと覚えています」

○戦場での女の子（フラッシュユ）

女の子が水野を見据える。

○幼い日の舞子（フラッシュユ）

水野を見つめる幼い日の舞子。

○水野と幼い舞子

水野が激しく泣く。

水野を見て、舞子も泣きだす。

号泣し続ける水野と舞子。

○告別式・舞子の弔辞

舞子の弔辞が続いている。

静まり返った告別式の会場。

舞子の肩越しに水野の遺影が見える。

舞子「わたしが小さい頃、一度だけ大じい

ちゃんが泣いたこと、それは今でも覚えて

いて、とても大事なことのように思っ

ます。それはどういふことなのか。これ

からずっと考えていきます。大じいちゃ

ん、頑張って生きてくれましたね。大お

じいちゃんは戦争に行ったけど、でも帰

ってきて、頑張って生きてくれて——だ

から、今日、私はここにいます。ありが

とう。大じいちゃん、本当にありがとう」

○告別式会場

舞子の小さな背中とその先に祭壇に

置かれて水野の遺影が見える。

会場の後方に並んでいる兵士たち。

○斎場・入口

快晴の朝。陽の光が眩しい。

入口近くの一角にひまわりの花が咲

いていて満開を誇っている。

入口から駐車場への道沿いに木々が

並木のように続き、その中のひと際

大きい木の葉陰に、島村小隊の兵士

たちが並んでいる。

玄関前に、バス兼用の霊柩車が止まっている。水野のお棺が見送の人たちの合掌の中、霊柩車に納められる。

親族たちがバスに乗り込んでいく。

弔意を表すクラクションの音とともに、バスを兼ねた霊柩車が動き出す。

少し離れたところ、大きな木の葉陰の兵士たち、姿勢を正して見送る。

島村小隊長、抜刀、投刀して号令。

その声が凜として響き渡る。

島村「水野一等兵に敬礼！ 捧げ銃！」

水野の霊に一齐に銃を掲げる兵士たち。

島村「直れ！」

霊柩車はその前を過ぎていく。

○島村小隊

直立して見送っている兵士たち。バスが走って行く。

島村の声「これで我が小隊は全滅となった。

水野、貴様は想いを込めて、よく生きてくれた。礼を言う。だが、貴様と同時に

消えてしまうものがあるだろう。この国はそれを忘れつつある。私にはそれが悲

しい」

西川の声「この国はいい国だろうか、幸せだろうか」

別の兵士の声「女の人が泣いてはいないだろうか」

中山の声「子供たちは元気だろうか、戦争の不安はないだろうか」

別の兵士の声「男たちは遅いだろうか、

○空と海

汗をかいて働いているだろうか」

島村の声「我々の思いは残るだろうか」

そして、兵士たちが一人ひとり、光

の中に溶けて消えていく。

(字幕スーパー)

○水野と幼い舞子

フラッシュ・カット

水野が激しく泣く。

広がる海。

水野を見て 舞子も泣きだす。

海から見える八幡坂、それに続く緑

号泣し続ける水野と舞子。

濃い函館山。

そして、晴れ上がった空。

○ひまわり

ひまわりの花が陽に向かっていている。

(終わり)

輝くように咲いている。

本電子書籍は、2022年12月2日発行の『第28回函館港イルミネーション映画祭2022 第26回シナリオ大賞・受賞作シナリオ集』より、函館市長賞〔グランプリ〕受賞作品を抜粋したものです。

シナリオ集のお求めや、作品の映像化につきましては、本映画祭函館事務局までお問い合わせください。

第28回函館港イルミネーション映画祭2022

第26回シナリオ大賞 函館市長賞〔グランプリ〕受賞作品

昭和九十七年 夏

作：鈴木 享

※本作品の無許可掲載・転用を禁止します

2023年2月10日 電子書籍版発行

発行：函館港イルミネーション映画祭実行委員会 函館事務局

〒040-0055 函館市末広町4番19号（函館市地域交流まちづくりセンター内）

電話 0138-22-1037 <http://hakodate-illumina.com/>

制作：株式会社新函館ライブラリ

〒040-0051 函館市弁天町4番8号

電話 0138-84-1620 <http://www.nhakodate.com/>
